

Q26 LDとは

1 LD（学習障害）

<LD：Learning Disabilities>

学習障害とは、基本的には、全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態です。学習障害は、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されていますが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因ではないことが挙げられます。

2 LDの子どもたちにみられる特性

LDの子どもが実際にどんな特徴を示すか以下に例示を示しますが、これらは、どの子どもにもあらわれるというわけではありません。

- 聞く
 - ・集中して話を聞くことが苦手で、何度も聞き返します
 - ・似た音を聞き間違えたり、聞かれたことと違う答えをします
- 話す
 - ・話しているうちに話題が飛んだりずれたりします
 - ・指示代名詞を使つての会話が多いです
 - ・助詞がうまく使えません
- 読む
 - ・促音、拗音などの読み間違いが多いです
 - ・似た文字の弁別ができません
 - ・文字をぬかしたり、付け加えたりして読みます
 - ・音読が苦手です
- 書く
 - ・鏡文字があります
 - ・ノートへの書き写しに時間がかかります
 - ・漢字など一面多く（少なく）書いてしまいます
 - ・文字や文章を写すと、よく書き飛ばします
 - ・文字の形が整わなかったり、簡単な漢字が書けなかったりします
- 計算する
 - ・筆算で桁をそろえて計算ができません
 - ・かけ算九九の習得に時間がかかります
- 推論する
 - ・一つ一つの文は読めますが、それらをまとめて理解することが難しいです（文章題ができません）
 - ・図形の特徴や概念がつかめていません
 - ・図形をうまく書き写すことができません
- その他の特性
 - ・ボール運動や鉄棒、協応性動作がぎこちないです
 - ・はさみの使用やひも結び等、手先を使うことが苦手です
 - ・身体全体を使う動きや微細運動が苦手です

3 学習場面や、日常生活での配慮・支援

(1) 指導の基本的な考え方

- 子どもを大切にしたかわり
つまずきの様子（いつ・どこで・どのような）をよく観察し原因を探ります。
一人一人特有の学び方があるという視点を持ち、できないところだけでなく伸ばしたい面もみつけます。一人では、とらえきれない多様な側面があるので、複数の教員の共通理解のもと指導を行う必要があります。
- 学習指導の工夫
LDの子どもたちは、学習内容を習得するのに時間がかかったり、その子ども特有の困難さがみられます。授業の際には、学習の見通しが立ち、学習に取り組みやすいようにします。話し言葉の理解が困難な子どもには、視覚的教材を用いる等、特性に応じた教材を用意します。
- 成就感を味わわせ、自信を持たせる
一度に多くのことを求めず、できるようになったことをほめるようにします。「できた」という経験を積み重ねることで、学習に対する自信が生まれ、意欲的で主体的な活動につながってきます。
- 有効な学習の場の設定
LDの子どもたちの多くは通常の学級に在籍しており、通常の学級における指導を基本に対応していくことが重要です。しかし、学級担任の指導を確かにするために、教職員の共通理解を図ることも大切です。T・Tや特別な指導による対応など個に応じた手だても工夫します。

(2) 教室での指導の工夫

- 学習環境を整える
 - ・ 教室内のレイアウトと子どもの座席配置
見えやすく、使いやすいような物の配置、注意や目が届きやすい席の配置、よい学び方をしている子どもをモデルとできるような席の配置
 - ・ 時間的枠組みと授業の流れ
子どもに分かる提示（見通し）
一貫性があり、見通しがもてる学習環境
授業の細分化と流れにメリハリをつける工夫
- 指示は明確・簡潔・具体的に
 - ・ 注意を引き付ける⇒要点が明快で、手短で、具体的な指示
 - ・ 分かりやすく記憶に残る⇒口頭の指示に併せて、視覚的情報の活用
- 指導方法・教材を工夫
 - ・ 文字とことばと意味とを結び付ける手がかりが必要
 - ・ 言語指示を大事にすると共に、絵や図、写真など、文字以外の視覚的教材の利用
視覚教材の拡大、注意すべき箇所の図化（強調）、マス目や罫線の利用、板書の工夫、ノートを取り方の指導、音声教材の活用、具体物の操作（数量概念）、必要に応じた機器（計算機、パソコン）の活用など、有効な工夫
 - ・ 教師が日常的に実践している工夫を意識的に計画的に実施

(3) 自立活動の指導例

2 心理的な安定

(3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること

LDのある子どもは、自分の得意な面と不得意な面を知り、得意な面を活用することで困難を克服することができるという成功体験やそれを賞賛される経験などを積み重ね、自分に自信をもてるようにすることが、不得意なことにも積極的に立ち向かう意欲を育てることにつながる。

3 人間関係の形成

(4) 集団への参加の基礎に関すること

LDのある子どもは、友達との会話の背景や経過を類推することが難しく、そのために集団に積極的に参加できないことがある。そこで、日常的によく使われる友達同士の言い回しや分からないときの尋ね方などを、あらかじめ少人数の集団の中で学習しておくことなどが必要である。

4 環境の把握

(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること

LDのある子どもは、認知の偏りのために、物事の概念を理解することが難しい。様々な場面で見たり触ったりする体験的な活動とそれを示す言葉を関連付けながら学ぶことで、基礎的な概念の形成を図ることが出来るようにする。

6 コミュニケーション

(3) 言語の形成と活用に関すること

LDのある子どもは、文字や文章を読んで理解することに極端な困難を示す場合がある。聞いて理解する力を伸ばしつつ、読んで理解する力の形成を図る必要がある。その際、コンピュータのディスプレイに表示された文章が音声で読み上げられると同時に、読み上げられた箇所の文字の色が変わっていくようなソフトウェアを使って、読むことを繰り返し指導することが考えられる。

(5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること

LDのある子どもは、話の内容を記憶して前後関係を比較したり類推したりすることが困難なため、会話の内容や状況に応じた受け答えをすることができない場合がある。自分で内容をまとめながら聞く能力を高めるとともに、分からないときに聞き返す方法や相手の表情にも注目する態度を身に付けるなど、状況に応じたコミュニケーションが展開できるようにする。